

〈他者〉を楽しみ続ける子どもを育てる社会科の授業づくり —4年「郷土の伝統と文化」大竹手すき和紙を用いた「ひろしま鯉のぼり」を通して—

深渡瀬 聖子

1 はじめに

広島市の中学年が使用する副読本には、本単元の内容にかかわっては、原爆ドームや原爆の子の像など、被爆遺構を残し保護する人々の働きや平和への願いが取り上げられている。また、青葉出版の「わたしたちのきょう土 広島県」においては、壬生の花田植えや厳島神社が取り上げられている。4学年の社会科においては、県内の様々な伝統工芸や年中行事が取り上げられているため、広く認識されていない伝統工芸を取り上げることも、中学年の社会科においては必要な要件だと考えられる。伝統工芸について、産地が直面している主な課題として「需要の減少」、「後継者の不足」、「原材料・用具等の不足」が挙げられる。少子高齢化や核家族化、感染症後における年中行事の衰退などの理由からの課題も様々あり、そこから、これからの伝統工芸の在り方を考えていく上で、受け継ぎ次世代へつなげようと尽力している取組について学びを深めることも必要だと考える。

2 単元デザイン

(1) 本単元における教材「ひろしま鯉のぼり」

本単元で取り扱う「ひろしま鯉のぼり」は、現在広島で唯一となった「おおたけ手すき和紙の里」の手すき和紙を使い、全ての工程を手作業で作り上げている鯉のぼりである。現在は、広島市在住の作家「杉本海」さんが一人で継承している。鯉のぼりに使う大竹の和紙づくりは、江戸時代初期に始まったと言われており、現在は県内で唯一の手すき和紙である。広島県と山口県の境に流れる小瀬川沿いは、昔から和紙の生産が盛んだった。最盛期には1000軒ほど紙を漉くところがあり、主に消耗品を製作していた。その中の一つとして、鯉のぼりも作られるようになった。鯉のぼりを製作する業者は、昭和23年頃から35年頃には8軒あったが、大抵は、分業で、紙を裁断して白い鯉を作るところや絵を描くところそれぞれの専門で女性が多く携わっていた。現在も主流のナイロン製の鯉のぼりが安く作られるようになってきたことや、戦後の工業地帯の建設、山側の方のダムの建設などが相次ぎ、生産者が立ち退きになったことも重なり、昭和39年には鯉のぼりを作る業者はほとんど廃業したと言われて

いる。昭和 39 年に、杉本氏の先代、大石雅子氏がかつてあった分業の製作方法で引き継いだ、やがて一つの作業場で一貫して製作するようになった。大石さんの元でアシスタントをした後、後継者不在の状況を打破すべく、2018 年より、杉本氏が引き継ぎ、「ひろしま鯉のぼり」とブランドを立ち上げ、現在に至る。

2018 年に杉本氏が継承して以降、ひろしま鯉のぼりは、2020 年「ザ・広島ブランド」認定、その年、折り鶴タワーに展示、2023 年の広島サミットでの会場展示と、広がりを見せている。コロナが明け、観光客が増えたことから、折り鶴タワーを訪れた観光客からの注文もあり、初めは展示のみだった鯉のぼりの注文販売がされるようになった。地域の伝統そして先代、大石氏の「製作は手すき和紙のある大竹で」という思いも引き継ぎ、現在も、鯉のぼりは大竹市の作業場で手すき和紙を用いて、すべて手作り、一人で作られている。

(2) 「伝統工芸」がもつ課題と、その取組としての「ブランド化」

前川（2018）は、『伝統工芸品の「担い手」問題はかなり深刻な状況である。生産活動の縮小・弱体化という反面、「生活用品についてゆとりと豊かさをもたらすような質の

高い製品を求めることや、和風の生活様式への関心の高まりといった社会の消費活動の趣向の変化や観光資源としての需要など新たな希望も拓ける』と述べている。ひろしま鯉のぼりも、後継者不足の中引き継いだ後、ブランド化され、原爆ドームに隣接する折り鶴タワーにて展示、注文販売で制作されるようになった。現在、より多くの人に認識されようと努めている。総務省の調査からも、生活様式や社会経済等の変化に伴い、既存の顧客層を対象とした取組のみを実施していても今後の更なる需要の減少に対応できない可能性がある」とされ、新たな市場開拓・商品開発により需要を拡大する必要があるという分析された。高秀（2022）は、伝統的工芸品産業の低迷は、その価値を正確にかつ使用者の心を動かすほど効果的に伝えることができておらず、地元の人間と少数のファンが知っていることが多い。と述べている。これらのことから



製作の様子(昭和 20 年後半)



折り鶴タワー 広島サミットでの展示

も、認知され、広めることで次世代へのつながる一步となると考えられる。また、「ブランド化する」＝「ブランド」として価値づけることで、広く認知されることにつながり、その先の消費や継承などの幅も広がっていくと考えた。

(3)単元の目標ならびに単元計画

本単元の目標

- 大竹手すき和紙を用いた「ひろしま鯉のぼり」は、地域の人々が受け継いできたことや、地域や社会の発展など人々の様々な思いが込められていることを理解している。また、調査したり資料で調べたりして、まとめている。【知識及び技能】
- 歴史的背景や現在に至る経過、保存や継承などの取組などに着目して、「ひろしま鯉のぼり」の継承や発展を捉え、人々の願いや努力を考え、表現している。【思考力・判断力・表現力等】
- 「ひろしま鯉のぼり」の継承や発展について、主体的に問題解決しようとしたり、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとしたりしている。【主体的に学習に取り組む態度】

単元計画 全 8 時間

- 第 1 次 広島伝統工芸と「ひろしま鯉のぼり」・・・・・・・・・・・・・2
- 第 2 次 「ひろしま鯉のぼり」を保存、継承させる人たちの働き・・・・5(本時 5/5)
- 第 3 次 「ひろしま鯉のぼり」のこれから・・・・・・・・・・・・・1

(4)カリキュラムの連動と子どもの実態について

本単元は社会科カリキュラム上の「環境・文化」領域として設定する。これまで児童は、社会科において、広島県の地形や交通、人口などを中心に学んできた。その際に、産業や伝統工芸品にも触れた。また、「県内の特色ある地域」の学習においては、竹原市の観光客が増加している理由を考えることを導入として、地域の魅力やそれらを発信する取組や人々の工夫や努力に着目して学習した。今回、伝統工芸の授業を行う際も、「山や川の近くでの和紙作り」と県の位置や地形とつなげたり、町づくりに関わる人々の取組をもとに自分の考えを整理したりする活動を行ってきた。また、本単元は、「伝統を伝える・つなぐ」とテーマを設定し、道徳科との連動も図った。

3 検証授業における子ども見取り

(1)本時までの学習過程

単元の学習問題を、『「ひろしま鯉のぼり」とは何だろう。これまでどのように残されてきたのだろう』と設定し、手すき和紙ならびに手がき手作りこいのぼり発端や歴史、作り方などについて追究した。その際、「ひろしま鯉のぼり」の杉本氏、大竹手すき和紙の里の森本氏、竹中氏への取材を行い、保存、継承してきた人たちの働きや取組について動画やインタビュー記事をもとに考えた。和紙の原材料や鯉のぼりの道具

など実際に本物と出合わせたことで、原材料確保の困難さや製作の大変さ、実際に植物が製品になることへの驚きなどを感じており、教材をより身近に、自分事として捉えられた。その後、伝統的工芸品の課題や背景について考え、学習問題を『ひろしま鯉のぼりは、これからどのように伝え残されていくとよいのだろう』と設定した。そして、継承者が一人となっている中ででの努力や工夫、取組について話し合った。学習を展開していく中で、「知らない人が多い」、「受け継ぎたいと思う人が少ない」「生活スタイルが変わって飾る場所がなくなった」「飾る習慣がなくなっている」などの意見が挙がった。そこで、課題の対応する取組、未来へつなぐ取組の一つとして「広島鯉のぼり」をブランド化したことへつなげた。

(2) 本時の学習過程

伝統的工芸品の課題に対する経済産業省の施策に「伝統的工芸品の産地ブランド推進事業」があり、広島市も、「ザ・広島ブランド」認定制度を設けている。杉本氏も、継承したのち、「ひろしま鯉のぼり」とブランド化して現在に至る。本時は、課題に対応した取組の一つである「ブランド化」を取り上げた。まずは、抱えている課題やそれに対応する取組や子どもの考えを振り返った後、「ひろしま鯉のぼり」のブランド化説明し、そのメリットについて話し合った。インタビュー記事でさらに考えを構築した。子どもがメリットとして出した発言をもとに、「大量生産よりも・・・多く売りたいというよりも・・・」という杉本氏の言葉から、新たな視点で考え、伝統的工芸品を未来につなぐために何が大切なか、価値を交流した。

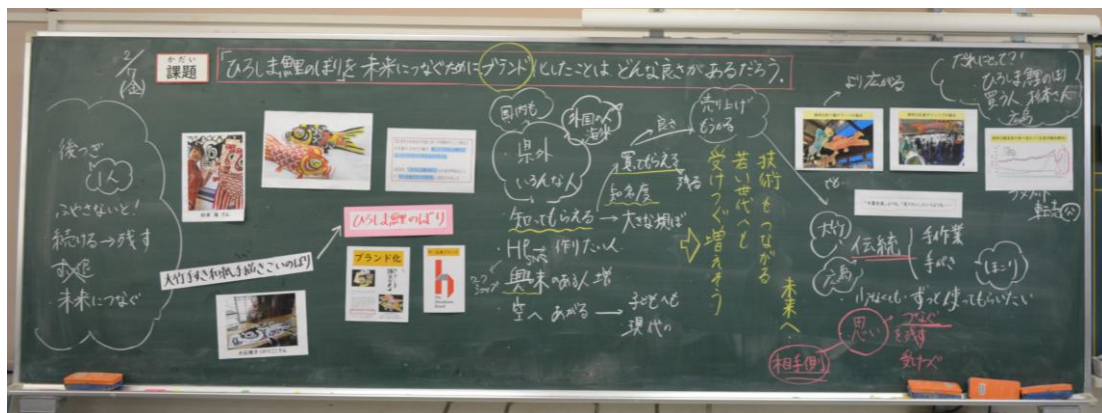


図2 本時の板書

本時の目標

「ひろしま鯉のぼり」の保存・継承の取組について、ブランド化のメリットやデメリットに着目しながら考えることができる。【思考・判断・表現】

学 習 活 動	指 導 の 意 図 と 手 だ て	評 価 の 観 点 と 方 法
1 前時までの学習を振り返り、単元の学習問題を確認する。 ・ひろしま鯉のぼりをブランドとして立ち上げたことを知る。	○これまでの学習の資料を視覚化し、自分の考えを形成する手立てとなるようにする。 ○前時までの児童の振り返りを紹介し、本時の課題へとつなげる。	
「ひろしま鯉のぼり」を未来につないでいくために、ブランド化したことは、どんな良さがあるだろう？		
2 具体的な事例をもとに、本時の課題について自分の考えを形成する。 3 考えをもとに、議論する。 4 再度自分の考えを構築し、表現する。	○保存・継承の一つとして広島ブランドに認定されたことを取り上げ、その利点などを、伝統工芸が抱える課題も踏まえて考えられるようにする。 ○まずはメリットを考える。児童から出た考えをもとに、それに反する考え【デメリット（課題）】もあるのではないか、と考えることで、双方の視点から伝統工芸の保存・継承について考えられるようにする。 ○考えの深まりを共有し、話し合いによる自分の変容を捉えられるようにする。	●「ひろしま鯉のぼり」の保存・継承の取組について、ブランド化のメリットやデメリットに着目しながら考えている。（0 PPシート）

4 本実践の見取り

授業前半のブランド化のメリットについて話し合いでは、注文数増加に伴う売り上げや収入増加が予想できること、広く知られることから後継ぎ問題の解消へつながる、技術もつながることに気付いた。また、普及し空に上がる鯉のぼりが増えることで、それを見た今を生きる子どもたちへの影響にまで考えをもつ児童の姿もあった。杉本氏のインタビュー記事を配布後、さらに話し合った。折り鶴タワーや広島 G7 サミット会場での展示、外国人観光増加に伴い、外国の人たちへ広がること等に気付いた。その後、児童の考えと反する考え（デメリット）として、杉本氏の言葉を提示した。

- T 『大量生産よりも、多く売りたいっていうよりも・・・』
C1 ひろしま鯉のぼりの伝統を後世に伝えるってこと。
T みんなのいう伝統って何？
C2 手作業とか和紙を使うこととか、手描きであることなど
C3 純粋に鯉のぼりを残したい
C4 お金儲けでなくて買ってもらってずっと使ってもらって残したいということ
C5 ずっと使ってもらって、広島のを残したい
T （杉本氏のインタビュー資料を配布）
C6 1つ1つていねいに思いを込めるってこと。
C7 伝統的なことを残さないことを大切にしている
C8 思いを残すことも大切だし、受け継いだ時その人たちの思いも残したいということ。
C9 相手側の「ほしい」という気もちも大切にしながら。

これまでは、広く知れ渡ること等から伝統的工芸品のもつ課題の解消に少しでもつながるであろうという発言が多かったが、ここで、それに反する言葉を示した。話し合

いを通して、むやみやたらではない、杉本氏が大切にしていること（価値）について考えることで、込められた「思い」について気付いた。これらの子どもの意見を、地域性（誇り）・金銭面・人々の思いなどカテゴリに分けて板書すると、複数の視点からのメリット（若しくはデメリット）も話し合うことができたのではないかと考える。

単元後には、ヒロガルシートで学びを振り返った。また、単元中に、道徳科、主題名「地域を大切に」資料名「祭りだいこ」を実施し、連動を図った。

ヒロガルシートでの記述「ひろしま鯉のぼり」

- 「ひろしま鯉のぼり」には、和紙を作るところから鯉のぼりの顔などをかくところまで、全てにたくさんの思いが込められている。全て手作業で、一つ一ついいねいにつくり、受け取った人の気持ちも考えていることを学び、私も人に物をあげるときには、相手の気持ちも考えたい。
- 伝統を残したい一心で取り組んでいることはとてもすごいと思う。「和」の文化を残しつつブランド化することで伝統に興味を持てるようにしている。そのことが、人手不足や材料不足などの解消につながると思った。
- 大竹手すき和紙やひろしま鯉のぼりは、全て手作業なところが一番良いところだと考えました、最近では機械が多いけれど、手作業ならではの温かみがあることを知り、買った人や作った人どちらもうれしくなる伝統工芸品だと思いました。このように考えると、ひろしま鯉のぼりは、地域のほこりと思えるのだと感じました。

【道徳科「祭りだいこ」振り返り】

- 広島に残るゆいいつの祭りや行事などは守らないと、もう世界中のどこをさがしてもなくなってしまふ。昔のことを引き継がないと、だれもしなくなる。そうすると、だれも楽しくないような街になってしまう。
- ひろしま鯉のぼりや熊野筆など、広島伝統工芸品やヒロシマ原爆の投下後の出来事など、そこにしかないものやわすれてはいけないことを守り、つなぎ、伝えていく。

「ひろしま鯉のぼり」の保存・継承について、関わる人々の思いや伝統工芸が持つ価値に気づき、自分事として捉え、今ある環境の中でできることについて意見を構築していた。道徳科の授業においては、「伝統を伝える・つなぐ」ことについて、ひろしま鯉のぼりの学習と連動する子どもの姿もあった。一方通行ではなく、テーマに対して何度も往来するよう働きかけるとともに、社会科の他単元との連動もより意識的に行うことも必要だと考えた。

今後も、より一層、授業改善に努める。また、学びの横断的な学び、他教科等との連動を意識して単元構成を考えるとともに、ヒロガルシートや OPP シートの工夫改善を目指したい。

<主要引用参考文献>

- ・伝統工芸品研究の現状と課題 前川洋平（2018）
- ・一般財団法人 伝統的工芸品産業振興協会 HP
- ・経済産業省 HP
- ・伝統的工芸品のラグジュアリーブランドへの戦略(2022)年 城西国際大学大学院 高秀 葵
- ・「ひろしま鯉のぼり」取材資料